

「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話しを紹介していきます。



松田 憲治さん
昭和4年8月1日生まれ。
下士幌在住

私の生まれと 幼い頃の思い出

私の父母は大正14年に幕別町の農家から分家して木野市街に移住し、同年12月に小さな種苗店を始めました。後に私の家業となる松田樹生園の創業です。

私は昭和4年に木野で生まれ、木野で育ちました。子どもころはひたすら野山を駆け巡り、川や沼で遊んだものです。蓬菜橋を渡り、音更川の河原に座り込みミミズを餌に糸を垂れると、面白いほど沢山のカジカが釣れました。神社下の小川でザリガニをつかみ、薪ストーブの上で焼いて食べたこともあります。様変わりした現在の木野市街からは想像もつかない、私の幼

少期の懐かしい思い出です。
援農で学んだこと

父は私が小学校6年生、弟の直喜が1年生のときに病気で亡くなりました。36歳で夫を失った母は、女手一つで子育てと商売を仕切る気丈なよく働く人でした。

昭和18年、戦争が激しさを増す中で、私は旧制帯広中学校(現在の帯広柏葉高等学校)に入学しました。この頃の思い出はなんと云っても援農です。音更の大牧や中札内の元更別に動員され、中札内では農家に住み込んで農作業に従事しました。今から思えば、あの年齢で親元を離れ、経験のない農作業を「我ながらよくやったな」というのが正直な感想です。援農を通じて、体力、忍耐力、自立心、協力が身についたのではないかと感じていきます。

母の背中を力に

中 学校3年生の夏休み、母は私に、当時としては驚くほどの大金を持たせ、種の仕入れに関西の取引先へ

行かせました。この買い付けをきっかけに、多くの同級生たちが進学を選ぶ中、私は進学をあきらめ、母を助け家業を継ぐことを決意しました。卒業後は毎日、木の苗や種を育てるために帯広市内の苗圃や畑に通いました。旧十勝大橋の上を母と二人でリヤカーを引いて歩いた日々、私にとって、そのころ胸に焼きつけた母の背中が、後の生きる原動力となりました。

兄弟で力を合わせ 松田樹生園を経営

私と弟は二人きりの兄弟で、周囲から仲がいいと言われます。私自身は弟に限らず、人と接するときには常に相手を思いやることを忘れずに歩んできたつもりです。

私にとって松田樹生園の社員は宝、家族と同じように大切な存在です。平成15年2月、社長の職責を弟に託しましたが、北海道農業と共に歩むという松田樹生園の経営理念は変わることはありません。社員たちにはこれからも農家、農協と手を携え、地域の農業



父、栄治氏の碑が建つ松林(木野東小学校西側)

未来を担う 子どもたちへ

7年前、私は脳梗塞に倒れましたが、日々、リハビリに励み、前向きに回復を目指してきました。おかげさまで85歳の現在も、体調が良い日は会社に出勤しています。今の自分たちがあるのは、先人たちが苦難の歴史を乗り越えてきたおかげです。その苦勞を振り返ることは、未来を生きる貴重な糧となります。人に感謝する心と差し伸べる手の温もりを子どもたちにも教えてあげたい。病を得てかえらますますその思いを強くしています。